

インドへのまなざし

—文学作品に見る「地域大国」インドの輪郭—

小松久恵（大阪大学）

## 報告要旨

### 1. 序

「インド」のイメージはどのように作られ、それはいかに変容してきたのか。本研究の目標は、様々な形式の文学作品を広く検証し、それによって「インド」の輪郭を明らかにするところにある。本報告では、その目標に向けての研究方法の提示を試みる。

文学作品を検証する際、書き手はどこに立って「インド」を見るのか、書き手のまなざしの方向に留意し、(a) 西洋からみたインド、(b) インド内部からみたインド、(c) そのどちらにも分類しきれない、境界上からみたインド、という3方向に分類する。そこに描かれた「インド」を比較考察することで、「インド」の輪郭が浮かびあがってこよう。主に取り上げるのは、インドと西洋との接触が強まった19世紀後半から20世紀前半の作品であり、当時作成された小説のみならず、旅行記や滞在記、または自伝や日記、雑誌投稿などのノン・フィクションにも注目する。

### 2. 西洋からみた「インド」

19世紀の後半から、西洋、特に英国女性たちによるインドへの接触が始まった。(a)布教目的の伝道団所属のミッション女性、(b) 夫の任務に従ってやってきた奥方(Memsahib)、(c) 「啓蒙書」執筆目的のジャーナリストというように、女性たちはその渡航目的によって大きく分類される。

(a)と(b)の女性たちは共に、インドで長く生活し滞在記を残した。しかし、自ら志願してやってきたミッションの女性と夫に付随してやってきた女性とでは、残された文章世界に大きな差異が見られる。(a)の女性たちは、家庭教師や看護学校の教師など、様々な立場でインド社会において教育活動を行った。Forbesの研究では、彼女らの生徒に向ける視線は概して冷淡、無関心であったことが指摘された<sup>i</sup>。しかし、南インドの看護学校に派遣されたミッション教師の日記には地元住民や生徒との交流の様子が明らかであり<sup>ii</sup>、彼女らの視線が決して一方的でなかったことが推測される。一方、(b)の奥方たちによる作品には、インド社会から距離を置いた、観察者としての視線がより明らかである。それらの作品はこれまで多数出版されており<sup>iii</sup>、その中で彼女らは毎日の生活や地方への旅行等を通してインド社会を観察している。昨今はそういった文献の再読、再評価が始まっており、それ

らの検証、分析を今後の研究課題とする。

(c)の作品として、1927年に出版され国内外で大きな話題となったKatherine Mayoによる*Mother India*を取り上げるが、その作中にはインド社会に対する啓蒙意識が非常に顕著である。アメリカ人ジャーナリストであるメイヨーはインド各地を視察した後に、自身が見た幼児婚の実態、女性の地位の低さ、衛生観念の欠如などを紹介し、インドの後進性を強調、自治には不適當であると結論づけた。この作品に対してインド社会からは大きな反論が起こり<sup>iv</sup>、またこの著に対する反論として『シスターインディア』、『ファーザーインディア』、『マザー・インディアへの答え』など多くの作品が相次いで出版された。Sinhaの指摘によれば、メイヨーは英国当局から旅行の資金や手配など、様々な便宜を受けており、『マザー・インディア』執筆の目的が英国統治の正当化にあったことが推察される<sup>v</sup>。しかし意図的にある部分が誇張されているとはいえ、メイヨーの作品に表れたインド表象は非常に興味深い。それに対するインド社会からの反論とあわせて、さらなる検証を行うことでインドイメージの成立と変容過程が浮かび上がると思われる。

滞在経験を基にした女性たちのインド描写を検証すると同時に、文学者による旅行記の検証を試みる。20世紀の後半から、インド出版界において旅行記や紀行文の出版が相次いだ<sup>vi</sup>。そこには近代から現代にかけて著名な文学者たちによる「インド」が収められており、それらの検証は文学者たちが求めた「インドらしさ」の解明につながると思われる。たとえば、インド研究者でもあるWilliam Dalrympleは6年間のインド滞在経験をもとに、日常風景ならびにインド各地での出来事をつづった。詳細な調査や観察に基づいたダルリンブルの描く「インド」と、たとえば一旅行者として神秘や精神世界を探求したAllen Ginsbergの「インド」は大きく異なる。しかし、帰属社会にはない何かを求めてインドを訪れる、という意味では、両者のインドに向ける視線の根底には共通点があるとも言えよう。アンソロジーに収められている近代の作品から、V.S. Naipaul、Paul Theroux、Ruskin Bond等、西洋圏の著名な現代文学者による旅行記を検証し、そこに表れる「インド」を明らかにして、西洋文化に存在してきた「インドイメージ」とその変容を考察したい。

### 3. インドからみた「インド」

では、インド内部から見た「インド」はどのように描かれてきたのか。ここでは女性による作品を中心に扱うが、自伝や日記などの文献を後世に残すことができた彼女らは、当時の識字率、教育の普及率から考えると、非常に限られた階層、いわゆるエリート層に集中していることが明らかである。インド社会において、彼女らのような社会的あるいは政治的な指導者たちが「インド」に向けるまなざしには多くの場合、理想の前に立ちはだかる過酷な現状に対する苦々しさが込められ、書き手と「インド」との間には明確な線が引かれている。たとえば、インド西部出身者を中心としたクリスチャン女性の自伝が多数存在しているが、そこではキリスト教によって救済されていないヒンドゥー女性は「可哀想

な」「救われるべき」存在として描かれ、「救われた」自身の立場と区別されている<sup>vii</sup>。あるいは社会改革、独立運動に指導者として参加した女性たちは、その文書において社会問題に対する自身の理想と、それに向けての働きかけを主題としており<sup>viii</sup>、そのいずれの作品でも「導くべき哀れな大衆」と自己が明確に区別され、大衆へ一方的なまなざしが向けられている。

そのまなざしの一方性は、獄中記においてより顕著に見られる。投獄という経験は、収監者にとって日常とは全く異質な生活形態を意味し、同時にクラスを超えた非日常的な交流をもたらす。政治犯としてAクラスに収監された女性たちは、Cクラスに収監される一般囚人を目の当たりにするが、それは恵まれた生活を送ってきたエリート女性たちにとっては、滅多に経験しえない「他者」との遭遇であったといえよう。Hansa MehtaやUrmiladevi Shastriらは、一般囚人の衛生観念や道徳心の欠如、知的文化レベルの低さを嫌悪し、距離を置こうとした<sup>ix</sup>。またVijaya Lakshmi Panditは、自身の世話係として任命されたCクラスの少女と間近に接しながらも、心情的には一切交流をもたなかった<sup>x</sup>。エリート女性たちにとって、一般囚の女性たちは「導くべき哀れな大衆」ではあったが、彼女らに同じインド女性としての共感を抱くことはない。彼女らのこの心情と、先に取り上げたメイヨーの主張はどのように類似し、またどのように相違しているのか。彼女らの視線を、インド内部からのものと明確に分類することができるのか、注意深く検証したい。書き手が大衆に向ける視線には、意図しないままに書き手の自我や社会認識等、非常に興味深い事象が多く表れている。報告者が入手し検証したこれらの文書は、ごくわずかなものでしかない。しかしより多くの文書が当時の雑誌やあるいは女性団体の会報等に掲載されていると推測され、さらなる資料を発掘収集し、より詳細な検証を行いたい。

では限られたエリート層ではない、一般の女性たちは「インド」をどのように見たのか。ここではいかなる問題意識が所在するのかに留意し、ごく一般的な無名のインド女性が自分自身ならびに「インド」をどのように認識していたのかを検証する。中心資料として20世紀初頭の北インドで人気を博した主要3雑誌「Stri Darpan」、「Grihalakshmi」、「Chand」を分析するが、そこに寄せられた女性たちの主張は、(a)社会問題をめぐるものと(b)家制度内の問題をめぐるものの二点に大別される。(a)は社会活動家や教育者などによるもので、女子教育の普及や寡婦問題、女性隔離制度問題などが論じられた。その中では特に、1920年代を中心にして西洋文化に対する批判と自国文化の正当性を主張するものが顕著である。たとえば西洋社会での高い離婚率や未婚女性の増加をあげ、モラルの逸脱や家庭軽視を批判し、それと対照的に貞節で家庭的なインド女性を賞賛した。また女性雑誌はこぞって女子教育の普及を謳ったが、同時に西洋かぶれの、家庭を顧みないような自我の発達を非常に恐れていた。ゆえに社会問題をめぐる論文では、「貞淑」「家庭重視」「高い精神性」などの「インドらしさ」が繰り返し謳われている。(b)は匿名による投書であり、もっとも多くの投稿欄をもっていた1930年代のチャンド誌の読者投稿には、毎号10通前後の手紙が掲載された。そこでは寡婦の惨状や婚家の非道など、ごく私的な問題が切実かつ赤裸々に語

られ、「インド女性らしさ」という社会規範に縛られた女性たちの惨状が明らかになっている。女性たちの多くは、自らの境遇に対してあきらめと嘆きの声を上げるのみであり、そこから抵抗や怒りの声を読みとるのは容易なことではない。彼女らが社会規範による束縛をどの程度知覚していたのか、資料の再読に努めたい。

#### 4. 「境界上」からみる「インド」

インドを見つめる上で、その書き手の立場が西洋にもインド内部にも完全には属さない場合がある。たとえば、(a)外の視点をもちながら内部から見る「インド」であり、あるいは(b)移民社会から見る「インド」である。(a)の例として、近代インドで社会活動家として活躍した **Cornelia Sorabji**を取り上げる<sup>xi</sup>。ソラーブジーは英国留学からの帰国後、女性や子供の権利のために法律家として活動しながら、社会改革を主張し続けた。彼女は国の独立よりも社会の改善こそを重視すべきだと訴え、2で取り上げた『マザー・インディア』を支持したことで、当時の指導者層、知識人、エリート女性らからこぞって批判された。ガンディー並びに国民会議派主導の独立運動が盛んであった時代に、ソラーブジーが流れに反対する意見を唱え続けた点は特筆すべきである。インド内部で活動しながらも、ソラーブジーは「インド」ならびに「インドらしさ」に拘泥することなく、広い視点をもって活動した。彼女の主張を3の前半で取り上げた、インドエリート女性たちのそれと比較考察することで、それぞれが描いた「インド」像がより明確になることが期待されよう。また現代インドにおいて、海外経験が豊富な作家や映画監督が見る「インド」を考察する。作家たちは海外経験によって得られた知見と比較しながら、インド社会を否定、自虐、軽視、あるいは賞賛、正当化といった複雑に入り混じった視線で描く<sup>xii</sup>。また映画監督の **Anurag Kashyap**は、話題作「Dev D」<sup>xiii</sup>に関するインタビューで、作品が広く受け入れられたのは「インドが自己憐憫 (self-pity) の国」であるからだと言った。複数のインタビュー記事において彼はこのself-pityという言葉をつかっており、現代のインド表象を考察する上で、この言葉はひとつの重要なキーワードとして留意される必要がある。(b)の例としては、昨今広く取り上げられるようになった移民文学における「インド」を考察する。帰属社会の文化が最も強く表れる場としての結婚、ならびに恋愛に注目し<sup>xiv</sup>、文学<sup>xv</sup>作品に表れる「インド」の特徴を検証したい。特に移民社会を描いた文学作品は、無数に存在しており、適切な資料の選択が必要となる。以上取り上げた資料はかなりの広範囲に渡るものであるが、これらを注意深く検証していけば、地域大国「インド」の輪郭が重層的に浮き上がってくることが期待されるであろう。

- 
- i Geraldine H Forbes, In Search of the 'Pure Heathen': Missionary Women in Nineteenth Century India in Alice Thorner ed, *Ideals, Images and Real Lives: Women in Literature and History*, 2000 Orient Longman.
- ii Leaves from our Ongole Diaries 1934 in American Baptist Foreign Mission Societies Record 1817-1969 【マイクロフィルム】
- iii Pat Barr, *The Memsahibs; The women of Victorian India*, 1976 Secker & Warburg, London. / Margaret MacMillan, *Women of the Raj*, 1988 Thames and Hudson. / Fanny Parks, *Wanderings of a pilgrim in search of the picturesque*, 1975 Oxford University Press. / Julia Maitland (introduction, notes and appendices by Alison Price), *Letters from Madras; during the years 1836-1839*, 2003 Oxford University Press. / Indirani Sen ed. *Memsahibs' writings; Colonial narratives on Indian Women*, 2008 Orient Longman. など
- iv ガンディーはこの著を、初めから汚いもの、古いものを見ようと言う意図でインドを訪れた「下水管視察者 (drain inspector) によるレポート」だと批判した。
- v Mrinalini Sinha, *Specters of Mother India; The Global Restructuring of an Empire*, 2006 Zubaan. 第2章 pp66-108.
- vi H. K. Kaul chosen and ed, *Travelers' India* 1997 (1979) Oxford University Press. / Indira Ghose ed, *Memsahibs Abroad; Writings by women travelers in Nineteenth Century India*, 1998 Oxford University Press. / William Dalrymple, *City of Djinnns* 1994 & *The Age of Kali; Indian Travels and Encounters* 1998. / Dom Moraes ed *Indian journeys*, 2001 Penguin Books India. / *Writings on* シリーズ 2001-2008 Penguin Books India.(Delhi 2001/ Kerala 2002/ Bombay 2003/ Lahore 2005/ Allahabad 2007/ Lucknow 2007/ Calcutta 2008/ Hyderabad 2008) など
- vii Anandibai Karve, *Autobiography : Anandabai Karve'* in New Brahmans, five Maharastrian families, Los Angeles, 1963 Univ. of California. / Krupa Sathianadhan, *Saguna: The First Autobiographical Novel in English by an Indian Woman*, 1895(1998)OUP. / Lakshmi Bai Tilak, *I follow after: An autobiography*, 1950 Oxford Univ. Press. / Parvati Athavale(Tr Justin E. Abbot), *Hindu Widow; An Autobiography*, Reprint. 1986 New Delhi, Reliance Publishing House. など
- viii たとえばネルー一族の女性による自伝 : Krishna Hutheesing, *With no regrets : An autobiography*, 1952 Oxford Univ.Press. / Nayantara Sahgal , *Prison and chocolate cake*, 1954 New York: Alfred A. Knopf. / Vijaya Lakshmi Pandit, *The scope of happiness*, 1979. / Manmohini Zutshi Sahgal, *An Indian freedom fighter recalls her life*, 1994. など
- ix Hansa Mehta, Vividh Vishay ; Mahilaon ka jel-jivan.(各種議論 ; 女性の投獄生活) Chand, 1931 Sep. / Urmiladevi Shastri, *Karagar; Jel-jivan ka antarik chitra*(刑務所 ; 投獄生活の内部描写), 1931(1980)
- x Vijaya Lakshmi Pandit, *Prison days*, 1945 Calcutta: The Signet Press.
- xi ソラーブジー自身の著書として *The Purdahnashin*, 1917 Thacker, Spink&Co, Calcutta. / *India Recalled*, 1936 Nisbet & Co.Ltd, London. 研究書として Chandani Lokuge ed, *India Calling; the memories of Cornelia Sorabji, India's First Woman Barrister*, 1934(2001), OUP. / Antoinette Burton, *Dwelling in the Archive*, 2003 OUP. / Suparna Gooptu, *Cornelia Sorabji; India's pioneer woman lawyer*, 2006 OUP. など
- xii Shasi Tharoor, *the Elephant, the Tiger & the Cellphone*, 2007./ Mukul Kesavan, *The ugliness of the Indian male and other propositions*, 2007./ Shoba De, *Superstar India*, 2008. など

---

xiii 「Dev D」2009年1月後半の封切り後、毎日のようにメディアに取り上げられており、映像など海外の映画からの影響が多く見られた作品であると同時に、現代インド都市文化のモラルから逸脱した部分を描いたとして高い評価を得た作品。もともと1917年に発表されインド人から広く愛されてきた **Devdas** という悲恋小説がベースになっている。

xiv 英国ムスリムコミュニティが描かれた例として **Nadeem Aslan, Maps for lost lovers, 2005**. 英国シクコミュニティの例として **Bali Rai, Rani & Sukh, 2004**. 米国ヒンドゥー(ベンガル) コミュニティの例として **Jumpa Lahiri, the namesake, 2003**. など